慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	肯定的な自己同定化における他者の役割 : 「ハーフ」カテゴリへの肯定的な解釈の構築
Sub Title	The role of others in the process of positive self-identification : the constructions of positive interpretations of the haafu category in Japan
Author	佐藤, 祐菜(Satō, Yuna)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.97- 110
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

肯定的な自己同定化における他者の役割

――「ハーフ」カテゴリへの肯定的な解釈の構築――[1)]

The Role of Others in the Process of Positive Self-identification: The Constructions of Positive Interpretations of the *Haafu* Category in Japan

佐藤　祐菜

１．序論

（１）人種・エスニシティへの認知的視座とアイデンティティ研究

本論文の目的は、「日本人」と「外国人」の親を持つ人々による、「ハーフ」カテゴリへの解釈の構築過程を明らかにし、肯定的な自己同定化における他者の役割を検討することである。本章では、人種・エスニシティ研究およびアイデンティティ研究という理論的枠組みを整理するとともに、「ハーフ」に着目する先行研究を概観する。

社会学や文化人類学などにおける人種・エスニシティ研究は、従来人種やエスニシティを客観的に実在するものと想定してきた。しかし 1970 年代以降は、主観主義的なアプローチが支配的となっている。例えば、エスニシティは、出自や文化といった客観的な指標の問題だとする立場だけでなく、人々の帰属意識の問題だという立場が現れた。一方人種は、従来生物学的な根拠がある概念だとみなされていたが、現在では社会的に構築されたものだとする立場が主流である。Rogers Brubaker らはこれを認知的転回（Cognitive turn）と呼ぶ（Brubaker, Loveman, and Stamatov 2004=2016: 236）。彼らが提唱する認知的視座（Cognitive perspective）によれば、人種やエスニシティは「世界のなかの事物」ではなく、「世界についての見方」（Brubaker et al. 2004=2016: 237）である。

人種やエスニシティに対する認知的転回によって、これらの研究ではカテゴリ化が大きなテーマとなっている（Brubaker et al. 2004=2016: 235-6）。そのうち、ミクロな次元における人々のカテゴリ化に着目する研究としてアイデンティティ研究が挙げられるだろう。これまでアイデンティティ[2)]とは、そこにあるものではなく、自己と他者との相互行為のなかで「なる（’being’ or ‘becoming’）」ものだと指摘されてきた（Jenkins 1996: 4; Hall 1990=2014: 93）。Richard Jenkins によれば、それは自己による定義づけ（internal self-definitions）と他者による自己への外的な定義づけ（external definitions）の相互行為によって構築される過程だからである（Jenkins 1996）。

しかし、アイデンティティとは単なる名前やラベルの問題ではない。自己と他者との相互行為のなかに印象操作や他者が取る態度が含まれているように、それは意味づけ（meaning）の問題でもある（Jenkins 1996）。そのためアイデンティティは、名称上のアイデンティティ（nominal

佐藤祐菜「肯定的な自己同定化における他者の役割――「ハーフ」カテゴリへの肯定的な解釈の構築」『三田社会学』第 24 号（2019 年 7 月）97-110 頁

identity）と実質的なアイデンティティ（virtual identity）に分けることができる（Jenkins 1996）。前者はアイデンティティにおけるラベルであり、後者はそのラベルが何を意味するのかを示す（Jenkins 1996）。

すなわち、人種・エスニックな自己同定化の在り方を解明するためには、人々がどのラベルを用いるのかだけではなく、いかなる意味の下でそのラベルを用いるのかに着目する必要がある。そこで本研究は、ラベルに対する人々の肯定的な意味づけにおける、他者の役割の重要性を提起する。

（２）「ハーフ」カテゴリに対する様々な立場

一方、近年英語圏においては “mixed race”、日本においては「ハーフ」と呼ばれうる人々[3)]の存在感が増している。それに伴い、人種・エスニシティ研究でも、”mixed race” studies および「ハーフ」研究が増加しつつある。日本における背景としては、「在日コリアン」と「日本人」との国際結婚の増加、在日米軍と「日本人」女性との間に生まれた子どもの存在、そして 80 年代以降定住し始めたニューカマーの「外国人」と「日本人」の親を持つ人々の間に生まれた子どもたちが成長したことなどが挙げられる。

上記の人々を指し得る言葉として、これまで「あいのこ」、「混血児」、「混血」、「国際児」、「ダブル」、「ミックス」、「ハーフ」など様々な語が多様な意味合いの下で用いられてきたことを先行研究は明かしてきた。それらによれば、日本によるアジア侵略が盛んだった時期には、旧植民地出身者との「混血」が問題化される傾向にあった（坂野 2009:190）。だが、戦後 GHQ の支配が終わると、米軍関係者と日本人女性とのあいだに生まれた「混血児」が社会問題化される（堀口・井本 2014; Okamura 2017; 下地ローレンス 2018）。

現在の「ハーフ」の用法は、70 年代頃から広まり始めた（岡村 2013: 37; Okamura 2017: 43）。そして「欧米系・白人系のバックグラウンドと美しい外見、英語能力や外国生活経験などの文化資本、中流以上の階級イメージ」（高 2014:80）といった偏った表象が現在では広まっている（Okamura 2017; 下地ローレンス 2018: 225）。一方で、「ハーフ」は「半分」であり中途半端だというイメージを持ちうること、イメージに当てはまらない人々は排除されてしまうこと、「血」の割合が想定されることなどを理由として、「ハーフ」を否定的に捉える人々がいる（堀口・井本 2014: 66-7; 岡村 2016: 52; Okamura 2017: 45; 下地ローレンス 2018: 196）。

このような背景から、ラベルの貼り変えによって「混血」や「混血児」、「ハーフ」といった語のイメージの転換を図ろうとする立場がある。例えば、「ダブル」、「国際児」、「ミックス（ルーツ）」といった語は、そのような立場から研究者や教育者、親や支援団体、一部の「当事者」を中心に用いられてきた[4)]（マーフィ重松 2002: 114; 堀口・井本 2014: 64-7; 岡村 2016; 下地ローレンス 2018: 195-204）。しかし、「ダブル」などこれらの語は必ずしも広まっておらず、「ハーフ」と自己認識する人々も多い（マーフィ重松 2002; 堀口・井本 2014: 77; 岡村 2016: 53; 下地ローレンス 2018: 202-4）。

一方、新しい語に新たな意味を付与しようとする立場とは反対に、現在最も流布する「ハーフ」という語を用い、その意味を再構築しようとする立場があり（岡村 2016: 55）、この語を用いた SNS やメディアによる「当事者」の発信がその意味を再構築させていく可能性も指摘されている（堀口・井本 2014: 70-2; 下地ローレンス 2018: 229-49）。

これらの立場に対して、本研究が対象とする人々は、「ハーフ」に代わる語を用いているわけでも、その意味を積極的に社会に発信しているわけでもない。しかし、彼・彼女らの日常のなかで「ハーフ」という語と交渉し、その意味を積極的に捉えなおした人々である。

このようなアクティビズムに回収されない人々は、先行研究でも対象とされてきた。「ハーフ」と呼ばれうる人々自身の意味世界を対象とした研究は、彼・彼女らによるイメージの再生産・解釈・再構築（渡会 2014; 川端 2014; 工藤 2016; 下地ローレンス 2018 ほか）や、その自己同定化を調査してきた（小ヶ谷 2016; Osanami-Törngren 2017 ほか）。Sayaka Osanami Törngren によれば、ある人にとって、「ハーフ」として通すこと（パッシング）は自己による選択の結果だが、ある人々にとっては、他のカテゴリ（例えば「日本人」というカテゴリ）に自己を位置づけられないという制約の結果である（Osanami-Törngren 2017）。また、川端浩平は「在日コリアン」の「ダブル」というカテゴリを巡る文脈のなかで、「一つの言葉に収斂されない彼／彼女らの日常的実践における戦術性」（川端 2014: 237）を模索する必要があると述べる。

これらの指摘を踏まえると、どのカテゴリに自己を位置づけるのかだけではなく、どのような意味づけの下で自己をあるカテゴリに位置づけるのかという問いは、さらに追究されるべきである。しかし、これまでの先行研究は、個々人の「ハーフ」カテゴリへの解釈が日常のなかでいかに構築されているのかという過程を十分には追及してこなかった。そのため、彼・彼女らがいかに肯定的な意味合いの下で「ハーフ」になれるのか、という規範的な問いも十分には論じられていない。そこで本研究は、肯定的な自己同定化における他者の役割を検討するために、「ハーフ」と呼ばれうる人々が、いかにして「ハーフ」カテゴリへの肯定的な意味づけを構築したのかという問いを検討する。

本論文の構成は以下のようになっている。第二章では、調査対象者と調査の手法について概観し、第三章では、「日本人」と「外国人」の親を持つ人々3 名の語りを紹介する。第四章では、インタビュー結果の考察と本論文の結論を論じたい。

２．調査の対象と調査手法

（１）調査対象者

筆者は 2015 年から 2018 年に、「日本人」と「外国人」の親を持つ若者 32 人に対して、アクティブ・インタビューを行った。本論文はそのなかから 3 人のインタビュー・データを取り出し、分析するものである。本章では、調査対象と手法の詳細を述べたい。

本調査が「日本人」と「外国人」の親を持つ人々に対して行われた理由は、戦後に人種、民族、国籍を基準とした「日本人」と「外国人」の二分法（Kashiwazaki 2009; 下地ローレンス 2018

ほか）が確立したため、その間に生まれた人々が「ハーフ」とみなされやすいと想定するからである。ただし、本研究は日本社会における「ハーフ」カテゴリに焦点を当てるため、学齢期に日本で 3 年以上住んだ高校生以上の年齢の者（調査時）を対象とした。

それでは、このように設定された対象をどのように集めたのか。端的に言えば、筆者の元からの友人や、ボランティアや SNS の「ハーフ」グループなどで知り合いになった人々に依頼し、その後それらの人々を中心に機縁法を用いた。このようにして集められた 32 名の人々には大学生や大卒が多いため、その属性は階層的に上位の人々にやや偏っている。

以上のように集められた対象者のうち、本論文が対象とする 3 名は、従来否定的に「ハーフ」を捉えていたが、現在ではより肯定的に「ハーフ」を捉えなおした人々で、且つ深い語りが引き出せた人々である。また、全員神奈川県と東京都で育っているという限界はあるが、ルーツや属性は多様になるような 3 名を設定した。インタビュー時点の彼・彼女らの基本的情報は以下の表にまとめている。なお、個人情報保護のため、仮名を用いている。

名前	性別	生年(年齢)	母の出身国	父の出身国	職業	備考
山本玲央	男	1994 (20)	韓国	日本	大学生	韓国生まれ日本育ち。二重国籍だったが、20 歳のときに日本国籍取得。韓国には毎年行く。韓国語でコミュケーションが取れる。「俺は見た目で（ハーフと）分かんない」と言及。
加藤美咲	女	2001 (16)	フィリピン	日本	高校生	日本生まれ。小学校の高学年の三年間のみフィリピンで暮らす。二重国籍だが、日本を選択しようと考えている。タガログ語と英語がある程度喋れる。母親とは日本語と英語、タガログ語のミックス。「ハーフなんで、顔が濃い」と言及。
新井エイミー	女	1992 (24)	日本	ノルウェー	社会人（大使館関係）	日本生まれ日本育ち。二重国籍だったが、22 歳のときに日本国籍を選択。ノルウェーには二度行ったことがある。父親は日本語と英語半々だが、本人は日本語のみ用いる。英語は「聞けるけど喋れない」。自身の見た目について、「外人の顔」と言及。

表　インタビュー対象者の基本情報（仮名）

（2）アクティブ・インタビュー

集めた調査協力者を対象として、本研究はインタビュー調査を行った。まず、本研究は、人々の解釈やアイデンティフィケーションを主題としているため、複雑な対象の研究を試みる質的研究（Flick 2009=2011）を採用した。また、そのなかでもアクティブ・インタビュー（Holstein and Gubrium 1995）の手法を用いた。

アクティブ・インタビューとは、質問者と回答者の双方の能動性を想定し、両者がインタビュー・データを作り出す主体であると捉える社会構築主義的なインタビュー手法である。ただし、この手法は、語りがいかに構築されたのかという方法だけではなく、いかに語られたのかという内容も分析に組み込む（Holstein and Gubrium 1995）。

本研究がアクティブ・インタビューを採用した理由は主に二つある。第一に、アクティブな手法によって、回答者が普段当たり前だと捉え、わざわざ言及しようとしない語りまでを引き出すためである。第二に、筆者の立場性によって、インタビューは必然的にアクティブなものにならざるを得なかったからである。筆者は「日本人」とニューカマー「韓国人」の母親を持つため、インタビュー協力者の側から筆者に質問が投げかけられることが頻繁にあった。

調査にあたっては、以下の倫理的配慮を行った。まず、協力者を高校生以上に設定のうえ、インフォームド・コンセントを徹底した。具体的には、筆者が学部生だった頃に行った聴き取りでは、相互に信頼関係がある人が対象として選ばれたうえ、事前の説明の下、口頭による承諾がなされた。また、筆者が修士課程入学以後に行った調査では、筆者の元からの知り合いだけではなく、幅広い人々が対象になった。そのため、書面による承諾をもらっている。また北村文によれば、アクティブ・インタビューには、質問者と回答者の権力関係を十分に検討していないという批判が想定される（北村 2013）。この指摘を踏まえて本研究では、解釈し、記述する調査者としての権力を意識し、自身の想定に合致しない語りであっても聴くことを心掛け、できる限り分析に加えた。

３．否定的からより肯定的な「ハーフ」への解釈の転換

（1）本質主義的な解釈から構築主義的な解釈へ――玲央の場合

本章では、従来「ハーフ」を否定的に解釈していた上述のインタビュー対象者 3 名が、いかに同カテゴリに対するより肯定的な解釈を持つようになったのかを描く。

「韓国人」の母親を持つ大学生の山本玲央（20）は日本で育ったが、小中学生の頃、「日本の文化」に馴染めず、苦労したと語る。彼は「〔サッカーやバスケなど〕チームプレイ〔が〕苦手」だった。そしてそのことを、自身が「ハーフ」であるためだと考えていた。その頃の彼は「自分で自分を否定」しており、「ハーフのせいにしてる自分が嫌」で、「自分ダメなやつ」だと思っていた。当時の彼にとって、「ハーフ」とは否定的なものだった。

やっぱでも、<u>血が混ざってるんだ、っていう概念だったときは、すごい嫌だった</u>。いや、

ホントたぶん、おれ特有なのかな？そんなことなかった？血が混ぜものっていう事実が嫌だみたいな。何で俺は純血じゃないんだろうみたいな。

つまり、当時の彼にとって「ハーフ」とは「純血」と対置するものだった。また、彼が自分を「劣ったもの」と捉えていたのは、当時の日韓関係や日朝関係が影響している。彼によれば、その頃「ヨン様」ブームがあると同時に「嫌韓ムード」があった。また、「子どもってバカだから」、北朝鮮も韓国も「一緒にしてた」。さらに、彼の通う小学校では「韓国人の子」や「ペルー人のハーフ」がいじめられていた。そのため、「〔自分もハーフだと周囲に明かすことは〕俺はやめとこう」と思い、中学卒業までそれを隠していた。

しかし高校以降は、「ハーフ」であることを言えるようになった。それには大きく二つの理由がある。一つには、中学時代から通っていたボクシングジムの人々が玲央のルーツを気にせずに彼自身を受け入れてくれたからである。「ボクシングジムのみんなが受け入れてくれたから、自分に自信がもどったからだと思う。だから、高校行っても、自分で素直に言えたかな？って今は思う」。もう一つのきっかけは、国際的な雰囲気の公立高校に入学したことにある。

（聴き手：〔高校名〕ではさ、〔略〕周りに受け入れてもらってるみたいな思った？）うーん。受け入れてるってよりは、周りが受け入れてるから自分が受け入れたって感じかな。まあ微妙なニュアンスの違いだけど、受け入れられてるとは別に思ってない。（聴き手：周りが？）〔周りが彼・彼女ら自身のルーツについて〕普通に言ってるから、あ、そんな気を病むようなことじゃないんだってわかった。〔略〕別にそんな、うん、悩むことじゃないんだって分かった。たぶんそういうメカニズムだった。

このように、彼が肯定的に「ハーフ」になれたのは、周囲の人々が彼を「ハーフ」であると肯定的な意味づけの下で認めたからではなく、周囲の人々が彼・彼女ら自身を「ハーフ」だと肯定的に捉えていたからである。Jenkins（1996）は他者が自己をどのように同定化するのかが、自己自身による同定化に影響すると述べるが、ここでは、他者が他者自身をどのように同定化するのかが、自己による自己同定化に影響を与えている。

現在の玲央は、「ハーフ」と自己のアイデンティティとの関係を以下のように捉える。

（聴き手：ハーフっていうことは自分のなかでどういう位置づけ？ハーフってことは重要な自分を構成してるアイデンティティだと思う？それともあんまり意識しない？ハーフってこと。）うーん。難しいな…。あんね、ハーフだということが自分を構成してるとは思わない。ただ、国籍違う人が結婚しただけだから、それは。別に、人間に影響を及ぼすほどのことではないと思ってるけど、ハーフとして知った環境は自分を構成してると思う。ハーフとして悩んだり、まあ辛い経験したり？あと、それを乗り越えたとか。〔略〕別にハー

フって抽象概念で、ただの言葉だから。別にそれが何か構成してるとは思わないけど。事実は、ハーフとして経験した事実はあるから、それは自分だと思う。

このように「ハーフ」を「論理的に」捉えられるようになったきっかけとして、大学入学のための世界史の「受験勉強」を玲央は挙げる。それによって、「今生活してる日本の文化？は当たり前じゃない」と気づき、論理的に捉える思考を身に付けたという。

現在彼は、「韓国人だから、俺は怒りっぽい」、「韓国人だから俺はチームプレイができない」と捉えていた従来の認識を変えている。彼によれば、「別にそれは日本人も出来ない奴いるから、〔ハーフや韓国人であることは〕関係ない、と今は思ってる」。一方彼は「ハーフ」と「ユダヤ人」を並列させ、「劣等感」を経験するからこそ、「論理的思考」が培われ、「短所を長所に変える力」を持つようになったと考えている。

このような彼の認識は、人種やエスニシティに対する研究者の社会構築主義的な見方と似ている。つまり、従来玲央は「韓国人」や「ハーフ」といったカテゴリを本質的なものと捉え、それらのカテゴリが持つ性質が自己を不可避に規定していると捉えていた。だが、現在彼は「ハーフ」というカテゴリによって「経験した事実」が自己を構築したと捉えている。

（2）否定的なものから必ずしも否定的ではないものへ――美咲の場合

「フィリピン人」の母親を持つ高校生の加藤美咲（16）は、自身の見た目について、「ハーフなんで、顔が濃い」、「目も大きいし」、「聞かれなくても周りは、この子日本人じゃないな、ハーフっぽいな」と思うと言及する。

聞かれなくても周りは、この子日本人じゃないな、ハーフっぽいなみたいな感じで、もう、すぐになんか、日本人じゃないよねって聞かれて、で、日本人じゃないって言われるのがそのとき〔小学校の頃〕あんまり好きじゃなくて、なんか、ハーフで、確かに他の血も入ってるけど、ちゃんと日本の血も入ってるし、でなんか、育ちは日本だし、だから日本人じゃないって言われるのが、なんか、あんまり好きじゃなくて、でもだからってハーフだよねって言われるのもあんまり好きじゃなくて、なんだろこう、自分でもそのときよくわかんなくて、とりあえず聞かれたら、ハーフだよって言って、で、育ちは日本で、日本のことも好きだよっていうのも言ってたんですけど。

このように、彼女は昔、「日本人じゃないよね」と言われるのが好きではなく、そのため「ハーフだよね」と言われることもそれと同義だった。同時に彼女にとって「ハーフ」とは、「日本の血も入ってる」ということを示す言葉でもあった。

その後美咲は、小学校の高学年をフィリピンで過ごし、中学では日本に戻った。そのとき、「肌の色が違くて、まあ暑い国だから、結構焦げて」た。そのため、「日本人じゃないなみたい

な雰囲気が」余計目立ったという。彼女は、「それがなんか、嫌で、学校は行ったけど、なんかあんまり目立たないようにして、でなんかしばらく、ちょっと色が抜けるっていうか、白くなるまで、まあ大人しくしてよう」としていた。そんな折、彼女が現在まで仲良くしている「タイとのハーフ」の親友に出会う。

> 〔初めて会った時に〕ハーフだよね？みたいに言われて、で、またその質問かって思ったんですよ、そのときに。なんか、日本とフィリピンどっちが好きなのって私の話、聞いてくれて、でなんか、日本人じゃないって言われるのが嫌なんだって言ったら、ああ、そうなんだって言われて。で、そんな感じでいろいろ相談乗ってくれたりして。で、なんだろ、その子に言われたのが、日本人じゃないよね、イコール外国人だよねってことじゃないと思うよって言われて〔略〕その子が、その日本人じゃないって言われて、嫌な気持ちの考え方？見方をちょっと変えてみたらって言われて。で、そっからちょっと意識しだすようになって。で、まあ、中学校二年生の三学期ぐらいに、転校してきた子がいるんですよ。で、その子が結構フレンドリーな子で、私に、日本人じゃないよねって言った時に、そんとき私、〔間〕今まではやだなって思ってたのが、全然嫌じゃなくなってて、だから、たぶん考え方が変わったんだなって思って。

このように親友に出会い、「ハーフ」に対する解釈が否定的なものから肯定的なものへと少し変化したことによって、「少しずつ明るくなっていって、で、友達がいっぱいできて」、「中学校はすっごいいろんな体験」ができた。

また、「日本人じゃないって言われるのが嫌だ」ということは、「フィリピン人」の母親にも相談した。その際、「なんで嫌なのか」という原因を探して「改善していこう」と言われた。その理由は今もまだ分からないというが、「一つ分かった」のは、「嫌、じゃなかったんだ」ということである。嫌だったのは、「差別じゃないけど、その、なんか、私日本人だよ、あなた違うよね、みたいな、なんか、なんだろ、ちょっと、軽蔑じゃないけど、ちょっと違うふうにみられる」ことだった。そこで母親には、「皆がほんとにそう思ってるのか分からないじゃん」と言われ、美咲は「勝手に自分で思い込んでる部分」を変えていくことにした。

このように、美咲は「日本人じゃない」というフレーズを、従来は「軽蔑」や他者化の意味が付与されたものと捉えていた。しかし、親友や母親との対話のなかで、周囲は必ずしもそのような意味の下、「日本人じゃない」というフレーズや「ハーフ」という語を使っているわけではないと捉えなおすようになった。

高校に入った今では「私はハーフだけど、全然日本人とフィリピンの違いがあっても、違いがあるけど、私は皆が思うような、思いっきり外国人ってわけじゃないし、日本育ちだから日本も好きだし、だからみんなと、なんか、楽しく？同じ目で馴染めっていうか、もう普通に日本人っていうか、普通に人として接して」ということを言うようになり、気が楽になった。こ

のような自己表象は、他者化や「差別」、「軽蔑」の意味が込められた「ハーフ」を避けるためのものだと考えられる。彼女によれば、今でも「壁は、まだ上ってる感じ」ではあり、「たぶんまたどっかで躓くんだろうな」とも思う。だが、「そのときは親友とか、お母さんにまた頼る」。

（3）「日本人」と両立しないものから「日本人」と両立するものへ――エイミーの場合

「ノルウェー人」の父親を持つ新井エイミー（24）は、中学・高校時代、「日本人であることを意識」してきた。例えば、「顔が違うだけで中身は日本人だ」と言ったり、「〔エイミーが〕日本人なの分かってるけど、でも日本語うまいよね、って〔周囲から〕言われると、それが嬉しい」と思ったりした。それは、「外人じゃないって思いたい感」があったからである。例えばエイミーは、「ハーフ」が理由で受けた嫌な経験を聞かれた際に、家族で仙台に旅行したときの経験を挙げる。そのとき、家族でカフェに入ると、「中にいる人が皆こっち〔を〕見た」。そして「感覚的には、日本人、日本人じゃない」と思っているのだろうと感じ、「そん時の視線は今でも覚えてる」。このように、「ハーフってことは、しょうがなくずっと意識させられてきた」ことだった。つまり、彼女にとって「ハーフ」であるということは、「日本人」として位置づけられないという制約（Osanami-Törngren 2017）によるものだった。

> 嫌な思いしたことないって言ったけど、あのハーフだってことはすごい言われる、からさ、（聴き手：うんうん）それが私は運がよくてヨーロッパ系のハーフだったからさ、どっちかっていうと髪の色とかはさ、羨ましがられる方だったんだよね、ちっちゃい時から。（聴き手：うんうん）いいねって背高かったりとか。だからまだ、まだ、良かったけど、でも、そういう言葉も私的には、こう、外人…日本人じゃないよねって言われてる、ようなものだったから。

このように、当時周囲から羨ましがられることも、「日本人」ではなく「外人」と思われていることと同義だった。そして「日本人じゃない」と言われることを、「結局周りは、私のことを少し違う子だと思ってるんだよなー」と解釈していた。

しかし二つの出来事によって、自身が「ハーフ」であることを受け入れるようになる。一つ目に、高校時代の先生に「あなたは日本人じゃないよね」と言われた際に友人に励まされた出来事である。

> 〔高校時代の先生が〕私に、あなたは日本人じゃないよねって言ったんだよね。（聴き手：あー）あの、すごい軽く。（聴き手：うん）たぶんそのハーフだよねって意味で言ったのか、まあ分かんないけど（聴き手：うん）それで、まあその時別に傷つきはしなかったんだけど、その一後から考えて、日本人じゃないのかなーみたいな。そういうことを〔SNS の〕日記に書いたときに、友達が皆こう、コメントでさ、ばあーって、そんとき皆ミクシィや

> ってたから。書いてくれて、なんか、そんなの関係ないよみたいなことを書いてくれて、そん時結構、こう、治療された感があったね。その、わだかまりみたいなのが。まあそういう、まあもちろん見た目は皆、違って当たり前、日本人同士で皆違うし、そういうことで別に、皆仲間じゃないとか思ったりしないよなーっていう当たり前のこと、気づいて。それが結構第一次。

つまり、「日本人じゃないよね」というフレーズは、当時のエイミーにとって他者化を意味するものだった。だが、友人に励まされたことで「違う」ということは必ずしも「仲間じゃない」ということを意味しないと解釈するようになった。当時を思い出すインタビュー時点では、先生はそのフレーズを「ハーフだよね」という意味で言ったのではないかと推測している。

二つ目に、高校時代から日韓交流に関わる活動をするなか、「別に日本人とか、韓国人とか関係ないよねっていう域」に行ったことである。エイミーは、これまで日韓交流の活動をしてきたことを、「韓国との相違点」から「〔自分は〕日本人なんだな、アジア人なんだな」と確認する作業だったと今では分析するが、その経験について以下のように語る。

> でもなんかそういう、本当に、仲良くなると、別に日本人とか、韓国人とか関係ないよねっていう、こう、域に行くんだよね。別にいろいろ日韓の間にいろいろ問題はあるけど、それとは別に、あなたはあなたで、私は私っていう、そういう、活動をしてる、うちに、たぶんだから私は、まあ日本人、日本で生まれて、日本で私の自我は形成されたわけだから、日本人であるのがベースで、そこにハーフっていうのが、個性として乗っかってるんだなっていう。それがあることによって、話も、まあ実際ハーフですかで始まる会話があるし、なんかそれこそ面接、バイトの面接の待機の時とかに、まあハーフですかって言われて、ああそうですみたいな、感じで会話が自然に始まったりする経験が今まであったから、これはなんか、いいことなんだなっていう風に割と思えた。

エイミーの語りは、カテゴリにこだわらない（「日本人とか、韓国人とか関係ない」）という一方で、カテゴリから自己を理解している（「日本人であるのがベースで、そこにハーフっていうのが、個性として乗っかってる」）点で矛盾するようにも思われる。だがそれが意味するのは、従来の彼女は「外人」や「ハーフ」「日本人」というものにこだわっていた反面、現在ではそれらにこだわらなくなったということだといえる。さらに、従来、「ハーフ」として羨ましがられることは「外人」と言われていることと同義であり、「日本人」とは両立しないものと彼女は捉えていた。しかし今の彼女にとって、「日本人」であることと「ハーフ」であることは両立するものになったといえる。

４．考察と結論

以上、従来否定的に「ハーフ」を解釈していた 3 名が、いかにして同カテゴリをより肯定的に解釈し直し、「ハーフ」になることを引き受けるようになったのかを描いてきた。本章では 3 名の結果を比べ、本論文の結論を述べたい。

Brubaker らによれば、人種やエスニシティは「世界のなかの事物」ではなく、「世界についての見方」（Brubaker et al. 2004=2016: 237）である。しかし、本研究からは同じ人種／エスニック・カテゴリを用いていたとしても、全ての人が同じ「世界についての見方」を持っているわけではないと示された。

本論文で対象とした 3 名は、同じ「ハーフ」というカテゴリを用い、その経験について語ったが、各々の用いている「ハーフ」という語は、それぞれ微妙に異なった意味合いを持っていた。Jenkins（1996）の言葉に換えれば、名称上のアイデンティフィケーション（nominal identification）は「ハーフ」でも、ラベルに付与される意味としての実質的なアイデンティフィケーション（virtual identification）はそれぞれ異なっていた。従来のエイミーにとって、「ハーフ」は他者化されることであり、「日本人」であることと両立しないことだった。一方玲央にとっては、「血が混じったもの」であり、「韓国人性」や「劣等性」という意味合いを持つものだった。また、美咲にとっては、他者化とともに「差別」や「軽蔑」の意味が込められたものであり、エイミーや玲央が意味していたものの両方を含んでいた。

一方で現在、エイミーは会話のきっかけともなる自己の「個性」として「ハーフ」を肯定的に捉え、それは「日本人」であることと両立している。また、玲央は「ハーフとして経験した事実」が自己を構成しているとして、それを構築主義的に捉える。また、美咲は「ハーフ」に否定的な意味が込められることがあると現在でも感じているものの、それが常に否定的に用いられているわけではないと解釈するようになった。

それでは、彼・彼女らはいかにして「ハーフ」をより肯定的に解釈するようになったのだろうか。彼・彼女らに共通していたのは、それぞれの解釈が他者との相互行為のなかで構築されていたということである。例えば、玲央や美咲の場合、「ハーフ」というカテゴリを「ハーフ」と呼ばれうる他者自身が肯定的に解釈していたことが、同カテゴリに対する自己の肯定的な解釈を構築するきっかけになった。また、玲央とエイミーは、「ハーフ」ではない「日本人」や「韓国人」から自己が受け入れられたことで、「ハーフ」を集合的な特質を共有するカテゴリではなく、むしろ誰でも持ちうる様々な「個性」の一つと見なすようになった。

このように、「他者」や「相互行為」の中身はそれぞれ必ずしも同一ではない。だが、「ハーフ」というカテゴリへの他者の肯定的評価や、それが人間関係を築くうえで必ずしも重要ではないという点に気づくことが、同カテゴリへの解釈をより肯定的なものへと転換させ、「ハーフ」になることを引き受ける契機となっている。

この観点は、既存のアイデンティティ研究に対しても、新たな視点を示す。なぜなら、自己による自己自身の定義づけは、他者による自己への定義づけとの相互作用によって構築される

（Jenkins 1996）と従来から指摘されてきたものの、本研究の結果は必ずしもその限りではないと示しているからである。例えば、玲央は「〔周囲が自分をハーフとして〕受け入れてるってよりは、周りが〔彼・彼女ら自身をハーフであると〕受け入れてるから自分が受け入れたって感じ」といい、「〔ハーフということは〕そんな気を病むようなことじゃないんだ」と思うようになったと述べていた。

つまり自己同定化は、他者による自己への定義づけと自己による自己自身への定義づけとの相互作用によって構築されるだけではなく、あるカテゴリがどのようなものであるかという自己の解釈にも依拠している。そして、あるカテゴリがどのようなものであるかという自己の解釈そのものが、他者との相互行為によって構築されている。そのため、肯定的な自己同定化を行うためには、他者の役割が重要であると結論づけられる。

以上の点を考慮するならば、「ハーフ」という語の意味を塗り替えるために別のラベルを用いるという研究者や教育者、親や支援団体、一部の「当事者」による戦略は、肯定的に自己同定化するための、ひとつの方法に過ぎないといえる。なぜなら同じラベルであっても、個々人にとってその意味づけは否定的なものにも肯定的なものにもなり得るし、肯定的な「ハーフ」への解釈といっても、その意味は多様だからである。

ただし、「ハーフ」を肯定的に捉える人がいるからといって「ダブル」を用いる人を否定することはできないと岡村兵衛（2016）が述べるように、本研究は「ハーフ」に代わる別の語やフレーズの使用という戦略を否定するものではない。筆者の 32 名のインタビュー対象者のなかには、二つのルーツを持つという自己のアイデンティティを説明する際に「ハーフ」という語を使用せずにより具体的に自己のルーツに言及したり、そのカテゴリ化に反対したりする人々もいた。そのような自己同定化の在り方は別稿で論じることとしたい。

【註】

1) 本研究は、筆者による修士論文（2018 年度）の一部を加筆・修正したものである。なお、修士論文の作成にあたっては、指導教授である塩原良和先生をはじめ、多くの先生方や院生、何よりインタビュー協力者の皆様にご協力いただいた。厚く御礼申し上げたい。

2)「アイデンティティ」という概念は多義的であるなどと批判を浴びている（Brubaker and Cooper 2000）。そこで本稿では、その相互作用の過程を重視する立場から、分析においては「同定化（アイデンティフィケーション）」や「カテゴリ化」という動作を強調する言葉（Brubaker and Cooper 2000）を主に用いる。ただし、日本語の文脈で「アイデンティティ」は、自分にとって重要なもの、帰属意識といった意味で用いられることを踏まえ、日常生活で「当事者」が用いる言葉として限定的に使う。

3) 本稿では「ハーフ」の構築を論じるため、人種やエスニシティに対する社会構築主義的な立場から「『ハーフ』と呼ばれうる人々」という言い方をするか、もしくは「日本人」と「外国人」の親を持つ人々と表現する。なお、「『ハーフ』と呼ばれる人々」という言い方は岡村（2016）や下地（2018）などが用い

ているものの、本研究が対象とする人々は必ずしも常に「ハーフ」とカテゴリ化されているわけではないことから、「呼ばれうる人々」という表現を用いている。

4) ただし「在日コリアン」の文脈では、主に「在日」の純血主義に対して「ダブル」という戦術が用いられてきたとも指摘されている（川端 2014: 224）。

【文献】

Brubaker, Rogers and Frederick Cooper, 2000, “Beyond Identity,” *Theory and Society* 29(1): 1-47, (Retrieved September 29, 2018, JSTOR).

Brubaker, Rogers, Mara Loveman and Peter Stamatov, 2004, “Ethnicity as Cognition,” *Theory and Society,* 33: 31-64. Reprinted in *Ethnicity without Groups*, Cambridge: Harvard University Press, 64-87.（佐藤成基訳，2016，「認知としてのエスニシティ」佐藤成基・髙橋誠一・岩城邦義・吉田公記編『グローバル化する世界と「帰属の政治」――移民・シティズンシップ・国民国家』明石書店，235-287.）

Flick, Uwe, [1998] 2009, *An Introduction to Qualitative Research (4th ed.)*, London: SAGE Publications. （小田博志監訳，小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳，2001，『新版 質的研究入門――〈人間の科学〉のための方法論』春秋社.）

Hall, Stuart, 1990, “Cultural Identity and Diaspora,” *Identity: Community, Culture, Difference*, London: Lawrence & Wishart, 252-260.（小笠原博毅訳，2014，「文化的アイデンティティとディアスポラ」『現代思想』42(5): 90-103.）

Holstein, James A. and Jaber F. Gubrium, 1995, *Active Interview*, Los Angeles: SAGE Publications. （山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳，2004，『アクティヴ・インタビュー――相互行為としての社会調査』せりか書房.）

堀口佐知子，井本由紀，2014，「第 2 章 ミックス・レースはどう語られてきたか――『ハーフ』にいたるまでの言説をたどって」岩渕功一編『〈ハーフ〉とは誰か――人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社，55-77.

Jenkins, Richard, 1996, *Social Identity: Key Ideas*, London; New York: Routledge.

Kashiwazaki, Chikako, 2009, “The Foreigner Category for Koreans in Japan: Opportunities and Constraints,” Sonia Ryang and John Lie eds., *Diaspora without homeland: being Korean in Japan*, Berkeley: Unive rsity of California Press, 121-146, (Retrieved August 6, 2018, http://ebookcentral.proquest.com/lib/keio/det ail.action?docID=656358)

川端浩平，2014，「第 8 章 〈ダブル〉がイシュー化する境界域――異なるルーツが交錯する在日コリアンの語りから」岩渕功一編『〈ハーフ〉とは誰か――人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社，222-42.

北村文，2013，「アクティブ・インタヴュー――質問者と回答者が協働する」藤田結子・北村文編『現代エスノグラフィー――新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社，56-61.

高美哿，2014,「第 3 章 戦後日本映画における〈混血児〉〈ハーフ〉表象の系譜」岩渕功一編『〈ハーフ〉とは誰か――人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社，80-113.

工藤正子，2016,「10 章 差異の交渉とアイデンティティの構築――日本とパキスタンの国境を超える子どもたち」川島浩平・竹沢泰子編『人種神話を解体する 3 「血」の政治学を越えて』東京大学出版会，303-331.

マーフィ重松，スティーブン，（坂井純子訳），2002,『アメラジアンの子どもたち――知られざるマイノリティ問題』集英社.

小ヶ谷千穂, 2016,「日比ダブルの若者が語る家族とアイデンティティ――日本育ちの若者の語りから（1）」『フェリス女学院大学文学部紀要』51: 1-27,（2017 年 8 月 21 日取得，FAIR フェリス女学院大学学術機関レポジトリ）.

岡村兵衛，2013,「『混血』をめぐる言説――近代日本語辞書に現れるその同意語を中心に」『国際文化学=Intercultural Studies Review』26: 23-47,（2016 年 9 月 26 日取得，Kobe University Repository: Kernel）.

――――，2016,「『ハーフ』を巡る言説――研究者や支援者の著述を中心に」川島浩平・竹沢泰子編『人種神話を解体する 3 「血」の政治学を越えて』東京大学出版会，37-67.

――――, 2017, "The Language of 'Racial Mixture': How *Ainok*o Became *Haafu* and the *Haafu-gao* Makeup Fad," *Asian Pacific Perspectives*, 14(2): 41-79, (Retrieved, November 29, 2018, https://www.usfca.edu/center-asia-pacific/perspectives/v14n2/okamura).

Osanami Törngren, Sayaka, 2017, “Ethnic Options, Covering, and Passing: Multiracial and Multiethnic Identities in Japan,” *MIM Working Paper Series*, 17(3): 1-24, (Retrieved May 10, 2017, https://www.mah.se/english/research/Centers/Malmo-Institute-for-Studies-of-Migration-Diversity-and-Welfare/Publications1/MIM-Working-Papers-Series/MIM-Working-paper-series-173-Ethnic-options-covering-and-passing---Multiracial-and-multiethnic-identities-in-Japan/).

坂野徹，2009,「混血と適応能力――日本における人種研究 1930－1970」竹沢泰子編『人種表象と社会的リアリティ』岩波書店，188-215.

下地ローレンス吉孝，2018,『「混血」と「日本人」――ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』青土社.

渡会環，2014,「第 6 章 『ハーフ』になる日系ブラジル人女性」岩渕功一編『〈ハーフ〉とは誰か――人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社，178-197.

（さとう　ゆな　慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程）